

石動さんだって強いんだぞ！

もちもちよもぎもち

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モブくんも強いけど、石動さんだつて強い。

守衛エクボかこいい

第二期おめでと。

# 目次

エクボと治りかけのインフルエンザ

1

師匠とストレス100%

—

12



# エクボと治りかけのインフルエンザ

∴ しんど（暇すぎて）

本も読み飽きた。

スマホは没収中。

ゲームは下の階。

部屋からは出れない。

なにこれ

暇すぎて寝転ぶ。

なんか緑のやつ飛んでる。見たことあるなあれ

「えくぼおおお  
!!!!!!」

「なっ?!」



私、石動やよい（いすぎるぎやよい）がこうなったわけを説明しよう。

私はインフルエンザとやらにかかってしまった。

しかーし！熱は1日で下がり、暇で超能力をもて余していたのだ！

そして今日が三日目！

「…というわけです」

「大丈夫か？」

エクボとは何回か会ってる。

もちろんモブくんにも会ってる。

というか同じクラスだし。

「くそ暇。どーしたのエクボ」

「シゲオに追い出されちゃったから、ここに来た」

「あー、律さんと大事なお話があるんだね、分かるよ」

「てゆうかお前、テレポーターションでどこでも行けるんじゃないの？」

「あー、その考えはなかった。けどエクボがいるから今はいいんだ。  
… 守衛さん、なっってくる?」

「——つたく、しょうがねえな」

「やっぱり私はそっちの方が好きだよ」

もー、マジで守衛さんに感謝。

「で? 俺様は今から何すりゃいいんだ?」



「え？横で寝てくれればいいよ？」

「は？」

「え？さ、おふとんはいつて（満面の笑み）」

「はあ…。」



「んー、あったかいね」

「そーだな…」

まずい、どんどんやよいのペースに引き込まれちゃう…！

「ごほっ」

「ほーら、まだ治ってねえじゃねえか」

「だから大丈夫だっごぼっ」

「いや、それ絶対大丈夫じゃねえだろ…」

ほら、横で寝てやるから休め」

「ぐすつ…ぐすつ…」

「なんだ？泣いちまったか？」

「ぢがう…鼻づまりがひどぐで…

あ、でもすつごいうれじい…」



「もうそれ超能力使って治しちまえよ」

「あー、その発想はなかったけどそれは無理かな」

「…」

「… 黙らないで」

「よし！ 霊とか相談所行こ！」

「?!」

「エクボ！ 手、離しちゃダメだよ！」

私はエクボの手を握る。

「せーの、で飛ぶからね？」

「せーの！」

二人で一緒にジャンプした。



「よーしよっ!」

「ぎゃっ」

「あ、ごめん霊幻師匠!生きてる?」

「…誰」

「あーモブくん!律くんとの大事なお話終わったんだね!よかったよかった!」

「おい降りろ…石動」

テレポーターションは成功して、何とか（靈幻師匠の上に）着地。

ただみんなキョトンとしている模様。

「ひどいなーモブくん、クラスメートの名前は忘れちゃダメだよ？」

「……ごめん、石動さん」

「いーのいーの！師匠、お仕事入ってないんですか？」

「今から……ってお前、インフルなんじゃねえの？」

「あー、元気です！いけます（究極のドヤ顔）」

「：まあい。モブ、石動、行くぞ」

「俺様、空気だな」

## 師匠とストレス100%

無理を言っただけで除霊に着いてきたものの…  
そんなにヤバそうなのでもないね。

「石動、モブ。さっさと終わらせて帰るぞ」

モブさんと私は、超能力でどんどん除霊していく。

「…これで終わりか？」

師匠が聞いてくる。

「いや、他の階。怪しいと思いますよー？」



「僕もそう思う」

師匠はしばらく考えてから言った。

「よし、ここからは単独行動で行くか。モブは3階、石動は4階を頼む。俺は2階に行く」



さつき除霊したのが1階。

ビルまるごと取り付かれてそんな感じがして、ちよつと不安だった。

…てか、今も不安。

さすがに病み上がりだときついな…

ボロボロの階段の先には、事務所の跡らしきものが残っていた。

段ボールやコピー紙が散乱してて、なんか不気味。

「サイコメトリーでも使うか…」

私は近くの机に手をかざして、残留思念を読み取ることにした。

「うわっ！」

読み取れたのは、恨みとか疲れとか？

ん？疲れ？

…ブラック企業？

社員の不満…かな？

「やあ、そこのお嬢ちゃん」

声がして振り返ると、おじさん（霊）が立ってた。  
あー、めんどくさくなりそう

「こんなところに一人で来ちゃあ、ダメだよ」

いつでも超能力が使えるように、全身に力をこめる。

「なんで… 来ちゃダメなんですか」

「それはね…」

「「おじさんみたいな人は君みたいな子が好きだからさ」」

「うっわ変態！」

しかも絶対人増えたよね？

全身にこめた力を超能力に変えて、何とかおじさん（霊）は追い払えた。

「お嬢ちゃん！」

「うっわまだいる！」

「こんなところにいたら、親が心配するだろう？」

「もっと親の気持ちを考えなさい」

「…」

忘れてたな、エクボに留守番頼むの。

「お家の方はね、君を思っただけで一生懸命真剣に働いていらっしやる。

それを考えたことはあるかい？」

「…」

「君みたいな子は、家で手伝いでもしてなさい。  
外で遊ぶなんて、全く…」

やば、頭痛くなってきた。

そろそろ来るかも。

… 93%, 94%, 95%, 96%…

「最近の若い奴らは…」

ピキピキッ

∴  
97%,  
98%∴

∴  
99%

石動やよい。

彼女のストレスはどんどん溜まり、  
限界を超えようとしていた……。

そして今、石動やよいのストレスは限界を超える！

∴  
100%!

「るっさいー!」

おじさん(霊)が怯む。

事実なのは分かるんだ。  
でも、でも!



「子どもの気持ちも考えてよっ！」

「石動！」

「石動さん！」

「子どもは親の操り人間じゃないのっ！」

何その態度？そもそもあんたの娘じゃねーし！

黙ってるからっていい気になってんじゃねーぞ！」

ぶわっ

周りが火で包まれる。

パiroキネシスう…

ストレスが100%になったときだけに出てくる私の超能力。  
コントロール出来ないし、いつ出るのか分からないから…

「おいモブ！水！水！ねえか?!」

「あわわわ…」

「：でもそれって事実なんだよね。私だってこんなこと  
したくてしてる訳じゃない：：こともないけど。

私が悪いんだよ、おじさんは悪くない。ごめんね」

おじさんを除霊する。

八つ当たり：：よくないね。

炎はいつの間にか消えていた。

「おい石動！水持ってきたぞ…？」

「…消えてる」

「あ、ごめんなさい」

急いで笑顔を作る。

なんか今、すっごい辛いけど…

意識が遠退いていく。

パイロキネシス使ったからな…

慣れてるけど。

「ごめん、師匠…」

「どうした?!」

「石動さん? どうしたの」



目が覚める。

「……どいっ?

ベッドに横になってる状態なんだけど、

ここ私の部屋じゃないんだよね。

「どうだ、目、覚めたか？」

「師匠お?!」

「お前、あのあと倒れてたんだぞ」

「あ、知ってますいつもです」

「いつも、なのか？まあ明日から家でおとなしく寝てるんだな」

「∴… んでここ、どこですか」

「どこって俺の家なんだが」

師匠の家…… oh……

「モブくんは？」

「とつくの前に帰ったぞ」

「そうですか……。なんかごめんなさい。それとありがとうございます」

「お前な、笑顔で全部乗りきろうとしてんだろ？」

「辛いときはな、逃げたっついていいんだ」

優しい声で言われる。

「Ich mag dich wahr-scheinlich.」

「はっ。」

「あ、なんもないです」

「そういうのが一番気になるんだよな…」

「そうだ、飯奢ってやるよ。何がいい」

「なんでもいい、という言葉を飲み込む。」

「やっぱラーメンですねー」

「いいのか？やよいが好きなのでいいんだぞ」



…  
やよい？

いま、私「やよい」って呼ばれたよね？

もー、心臓に悪いな…

はあ…